

(体育)

「する・みる・ささえ合う」

～仲間とともに進んで運動に親しむ子どもを育てる～

大阪市立大領小学校 研究部

1. 研究主題設定の理由

文部科学省では、スポーツ立国戦略として、運動する人、見る人（観戦する人）、支える人（育てる人）を重視し、連携と協同を推進することを掲げている。人々が生涯にわたってスポーツに親しむことができる環境をハードとソフトの両面から整備することで実現し、その環境の中で、地域スポーツクラブや学校、地方公共団体、企業などが連携し、スポーツ振興に取り組む体制をつくることを目指している。

このことを踏まえ、本校の研究テーマでは、進んで運動に親しむ子どもを育てることを目標とし、運動すること、運動を見ること、そして、協働することを通して、運動の技能や体力の向上、さらには思考力・判断力を身につけることができると考えた。

また、体育科の学習で運動のコツがわかる喜びを感じたり、友だちと支え合いながら運動する楽しさを味わったりすることは、これからも積極的に運動に関わろうという態度を養うことになる。このような積み重ねが、生涯にわたって運動に親しむことへとつながると考えている。

2. 研究の趣旨

大阪市教育振興基本計画の2つの「最重要目標」を達成するために重点的に取り組むべき施策のうち（6）健康や体力を保持増進する力の育成では、体力・運動能力向上のためのカリキュラムの作成と実践において次のことが明記されている。

〔体力・運動能力の現状については、「走る」「跳ぶ」「投げる」といった基礎的な能力の低下とともに、幼少年期に身に付けておくことが望ましい基礎的な動きが獲得されていないことが課題となっています。その課題を克服するためには、子どもたちの発達段階に応じて、幼少期より適切な運動に取り組むことが大切です。〕

ただ単に「体力・運動能力」の向上だけでなく、「心豊かに力強く生き抜き未来を切り拓くための学力・体力の向上」を総合的に育成できる唯一の教科である体育科の今日的な教育的意義は非常に大きいと考える。『する・見る・ささえ合う』を切り口として、仲間とともに進んで運動に親しむ子どもを育てることはもちろんのこと、自ら考え判断する力、課題を探究する力、仲間と学びあう力等、「体育科の学力」（技能、態度、思考・判断）を総合的に育むための指導法を研究する。子どもたちにとって苦手意識の強い器械運動領域での課題克服に全力をあげて取り組む。

3. 研究の概要

（1）研究主題にせまるため、研究の視点を以下のように3つ設定した。

『する』：進んで運動に取り組み、基本的な運動の仕方を身につける。（技・思・判）

【低】①楽しみながら進んで運動に取り組み、基本的な動きを身につけている。

【中】②ポイントを意識して練習し、基本的な運動の技能を身につけている。

【高】③練習の仕方を工夫して、基本的な運動の技能を身につけている。

『みる』：自分や友だちの課題を見つける。（思・判）

【低】①模範を見て、基本の動きを理解している。

②友だちの動きを真似しようとしている。

【中】③模範を見て、動きのポイントを理解している。

④友だちの良いところを見つけ、取り入れようとしている。

【高】⑤自分や友だちの動きを模範と比較し、課題を見つけている。

⑥自分や友だちの動きを模範と比較し、課題の解決方法を考えている。

『ささえ合う』：自分や友だちの課題を協力しながら解決する。（関・意・態）

【低】①安全に気を付け、友だちと一緒に準備や後片付けをしている。

②友だちの良さを認め、称賛したり、励ましの声をかけたりしている。

【中】③自分の役割を理解し、進んで場や用具の準備や後片付けをしている。

④友だちの課題を解決するために助言している。

【高】⑤協働しながら自分や友だちの課題を解決しようとしている。

⑥自分や友だちの特徴を生かした運動の仕方を考えている。

（２）前年度の成果と課題の分析を踏まえ、本年度は次の課題に重点的に取り組む。

①評価の観点の明確化⇒『する・みる・ささえ合う』の定義の明確化

②ささえ合う活動の充実（グループで協議）

③１時間の流れの明確化

④発問の仕方の工夫

⑤ＩＣＴ機器の効果的な活用方法の研究

これまでの体育科の学習との明確な違いは、指導者の役割にある。一斉授業の指導者としての資質だけでなく、アクティブラーニング（協働学習）を進める上で、ファシリテーターとしての役割が求められているのである。学習指導に対する確かな知識や教材・教具の効果的な活用方法に加え、「子どもたちの意欲を引き出す問いかけ」ができていくかという視点を持って授業づくりに取り組む。

４．研究の成果と今後の課題

今年度の研究の成果

（１）『場の設定や教材・教具の工夫』

①楽しみながら積極的に運動に取り組むことができた。

②身に付けた技を生かす場を工夫することができた。

（２）『ＩＣＴ機器の活用』

①動画を見ることで技のポイントや課題が理解しやすい。

②音楽のリズムを運動に活かすことができた。

③音楽で活動時間を区切ったり、活動内容を定着させたりすることができた。

（３）『ペア・グループでの学習』

①児童同士の支え合いが活発になった。

②技能の向上につながった。

今後の課題

（１）基本的な技能の定着

◎十分な時間

◎多様な場

◎感覚づくり

（２）ＩＣＴ機器の効果的な使い方

◎積極的な活用

（３）発問の仕方

◎力を引き出す発問の工夫